

彙報 , 奥付

雑誌名	漢文學會々報
巻	1
ページ	131-138
発行年	1933-03-10
URL	http://doi.org/10.15068/00146164

彙報

○學會發會式

學校内外の久しき待望の中に、發會の準備をささ意りなかりし我漢文學會は、いよいよその機を得て、茲に昭和七年二月二十日午後一時より、本館第二會議室にその發會式を擧げぬ。職員・先輩・學生・生徒、凡べて參會者百有餘名に達し、式は盛況裡にいと嚴肅に進められたり、その次第概況左の如し。

(一) 發會式

一、開會之辭

田波 又男 君

一、經過報告

藤川 蕉一郎 君

一、會長挨拶

島田 敬 授

本日は、此く大方の御參列を戴きまして、我が漢文學會發會の式を擧げ得ました事は、不肖會長として、此の土もない喜びであります。顧みまするに、我々が漢文學會を興したいと希望致しましたのは、昨今のことではないのであります。が只其の遺憾なき準備と、適當なる機會とを待つ爲に遂に今日に及んだのであります。然るに本學も開設以來三年を経まして、幾多の建設事業の結果、漸く諸制も完成し、殊に昨秋は畏れ多くも 陛下の御臨幸を

仰ぎ、優渥なる御勅語まで賜つたのであります。我々は等しく聖旨の辱けなきに感激し、自らの責務の重大さを痛感致したのであります。此の時に當り、我が學會創設の機運も亦熟しまして、遂に今日に於て漢文學會發會の儀を見るに到りました。抑、學會は他の何れの學會に於ても然るが如く、其の自由なる研究によつて課業の缺陷と不備とを補ひ、相互の結合に於て、學園の完全なる發達を期すべきであります。然らば學會の使命は實に廣く大きいのであります。其の先務とする所は、學風の樹立に在る。本學は今にして始めて諸制の完成を見たと言ひましても、其の實は光輝ある六十年の歴史を背景としての大學であります。此の赫々たる歴史は、勿論既に學校の性質に即して、立派な學風を樹立して來てゐる。然し我々は此の學風をして、更に新鮮にして氣概あらしむべきであります。今東西に於ける斯學の傾向を見まするに、夫々據つて立つ處がありますが、仔細に檢すれば一長一短であります。我々は、直に斯學に於てのみでなく、廣く天下諸學の動きに注意して、諸學の長を取り、東西の粹を聚め、固より既に有する堅實なる學風に素して、潑刺たる研究を興し、以つて天下に資する所あらんとする者であります。此く考へますると、我が學會の責務は實に重大である。幸にして御參列の諸先生の御指導にまち、會員諸子の努力によつて、本學會の機能をして遺憾なからしめん事を、切に希望して休まない次第であります。

(文責在筆記者)

一、學長祝辭

大 瀨 學 長

此の慶漢文學會が設立されたことは、色々の意味からして喜びに堪へない。即ち先づ本學會の設立は、他の諸學會の存在と等しく賀す可きである。學生は兎角平生は教授の講義を聴く事にのみ流れ易いから、特に機關を設けて方法其の他種々の事を究めねばならぬ。特に本學に於ける研究は他とは違つて、單に學問の研究のみでなく、直に之を教育の上に利用し得るから、其の意味からも本會の成立を祝したい。次に本學會で研究されるものの上からしても大いに祝す可き理由がある。元來日本人は日本人の文化の上から究む可きであるが、此の日本文化と密接な關係にある東洋文化の漢文研究は甚だ必要である。西洋に於ても、古典と現代的のものとは並行的に研究され、それが時代に依り相交替しつゝ流れてゐる。然し此の二つの文化は何れを撰む可しと言ふ様なことは出來ず、二者共に取る可きである。故に西洋でも大戦以來科學と共に古典を奨勵してゐる。地中海文化を承けてゐる佛蘭西、伊太利等が、此の固有の文化を維持するは我なりとの考の下に此の研究にいそしんでゐるが如きは其の適例である。我が國に於いても、日本文化東洋文化の眞髓を明かにせんとするは大いに必要なことであつて、かゝる意味からしても、本學會の設立を衷心喜ぶのである。(文責在記者)

一、顧問祝辭

服 部 博 士

本學會の設立に際し、私にも顧問になれとの事だつたので、私

には何も出來まいが、眞に備るだけでも喜んで引受けたのである。で、老人の癖として若い人に申上げるのであるが、本學の事は一に今より卒業するもの並びに學生諸君の力に依るのであるから、創設に關しても年寄等は當にしないで、若人が全責任を有つて行ふ可きである。次に若い人の此頃の研究傾向には一の弊がある。即ち土臺たる間口を狭くして、奥深く行かんとする惡弊である。本學の中堅となる可き人には、何處までも間口を廣くして、徐に高樓を建つ可きである。今日に於ては、東洋文化の研究は既に全世界的のものであるが、思ひ起すことは明治三十二年に自分が支那獨逸に留學した時のことである、當時は漢學研究の爲獨逸に行く事は明文が出せぬとて、在支四年間中に於いて、「但し書」の上で獨逸に行くとあつた。何故獨逸に行くかといへば、方法を求めに行くのである。當時はかくの如くであつたが、今日では大びらに獨逸その他に行き、支那には一寸立寄つて來る様子である。併し方法は外國人に取つても、その後塵まで拜する様になることは困ると思ふ。我々は何處までも支那人と提携して行く可きである。昔孔子は禮樂の壞を嘆いたが、今日の支那はそれ以上である。支那の將來を救ふ爲には、どうしても徳教を興さねばならぬが、その爲には日本人が之を助けねばならぬ。それにしても日本人は言葉が下手で、その爲に支那人と交際しても、文章は出來るが語が出來ぬといふ様な事があり、殊に話す時に、彼等は經を棒讀みする故、話が甚だ困難である。此の點よりして支那語の必要も大である。要するに漢學は一面世界の學問でもある故、我々は大きい

支那人とも西洋人とも提携して行かねばならない。(文責在記者)

一、評議員挨拶

内野 教授

私は評議員として挨拶に代へて、先づ二つの希望を申し上げ度い。一、は大塚學園の漢文學會は特有のものであつて欲しい、といふことである。之を爲すには様々なことがあらうが、先程島田會長並びに服部顧問の申された様にして行けば、自ら特有のものたり得ると思ふ。二、は従來漢文學界には折々風が襲來した。中等學校の漢文科廢止問題も週期的に起つて來る。之には斯文會も盡力して來たが、本大學は天下の中等教育を脊負うて立つてゐるものであるから、此の問題に關しても大いに是非の議論を發表すべきである。今までの高等師範では、國漢科であつた爲、幾分各人の研究が不徹底であつたかも知れないが、今後本學會では此の點を明かにし、天下を導いて行かねばならぬと思ふ。(文責在記者)

(二) 記念講演

發會式に引續き直ちに記念講演に入り、次の順序を以て、夫々熱辯を振はれたり。

一、行不由徑

諸橋 教授

漢學研究は徑によらずして、その正を得べき事を多くの實例に就きて説かれたり。

一、竹書紀年につきて

(別項掲載)

原富男先生

一、道を論じて孫中山に及ぶ

(別項掲載)

小柳 博士

一、閉會之辭

小林信明君

かくて何時しか時は移りて五時半に及び、暮色漸く迫りしかば急ぎ支關前に記念撮影を終へ、意義深き今日の發會式を了へぬ。

(三) 懇親會

發會式後、直ちに場を神田維新號に設け、午後六時より懇親會を開けり。顧問、評議員以下約三十名の出席者を得て歡語、場に溢れぬ。先づ諸橋教授の挨拶あり、次いで、松井博士、鹽谷博士、田口、佐藤(正範)、濱野の諸先生交々立つて漢學の大使命を高調せられ、若き學徒を激勵せられたり。

酒杯幾度か廻り、宴漸く酣なるに及べば、鹽谷博士得意の櫻井驛を音吐洪亮朗吟せられ、滿座三嘆を禁じ得ず、續いて原先生の支那民謡、小林君の詩吟等、盡くるなき興を添へて、春未だ到らざるに春風座に滿ち、我が學會の前途まことに洋々乎たるものありき。九時散會せり。

○第一回研究發表會

本學會劈頭の研究發表會は、五月二十一日午後一時より漢文學研究室に開かれぬ。諸橋、内野、森本、熊坂、峯間等の諸先生、原先輩等の御來會を得て、出席者凡て三十名、何れも熱心に左記研究發表を傾聽せり。

一、原始儒教に於ける指導原理の展開に就いて

小林信明君

氏は約一時間半に亘り、明確なる口調と眞摯なる學究的態度を以て、別項掲載の如き論旨を進められぬ。終つて直ちに批評茶話會に移り、四時過散會。

○春季講演會

單に内のみ籠らず、本會が外に向つての働きかけの一面たる講演會は、六月十一日午後一時より第二會議室に開かれたり。聴衆は四十名に過ぎざりしが、左の如き講演の論旨に魅了せられて時の移るも知らず耳を傾けぬ。順序及びその梗概次の如し。

一、開會之辭

福家君

一、漢文教育に關する諸問題

内野助教

一、學

帝大助教 高田眞治氏

一、伯夷傳と我が國體士風

中山教授

一、閉會之辭

諸橋教授

かくて會の終了したるは五時半頃なりき。

(尙本講演會の各御講演は、その略記を夫々別項に掲載したり)

○第二回研究發表會

十月十五日(土)午後一時より漢文學研究室に於いて、第二回例會を開催す。折柄霏々と煙る秋雨を冒して、諸橋、内野、森本、田口、寺田の諸先生始め、來會者凡そ三十名。左の發表を傾聽す。

一、陶淵明の詩境

上島一夫君

氏は先づ晉代の社會狀勢及びその思潮を一瞥して後、淵明の生立を考察し、進んで彼の本領を究めて、その詩境に及び、田園詩人として彼を詩境の最高峯に置きし所以の當否を究明せられたり。

一、伏羲卦を劃すの傳説に就いて

小島政雄君

(別項に掲載)

右發表を終るや、批評に感想に時の移るを忘れ、五時半散會せり。

○秋季講演會

待望の秋季講演會は、二ヶ年の北平留學を終へて最近歸朝せられたる、新進篤學の寺田文學士、及び東大社會學科の業を卒へて社會學的觀點より、古代支那社會を探究せられつゝある新進の學

徒、牧野文學士を迎へて、十一月十二日(土)午後一時より、本學第二會議室に華々しく開催せられたり。來會者七十名に近く室に溢れるの盛況なりしが、皆極めて靜肅にその所説を傾聽せられ時の移るをも忘れたり。因みに當日の次第左の如し。

一、開會之辭

福 家 君

一、讀注疏『本』字考

寺田范三先生

(別項掲載)

一、漢代王侯の相續制度

牧野巽先生

西漢に於ける王侯の相續を見るに、嗣子ある時は、相續あれども、若し嗣子死亡し、孫のみ存するが如き場合には、その封は回收せられたるものなりとて、「非子國除」の例を、漢書、史記等より實證せられ、又「亡後國除後の紹封復家」につきての様々の實例と共に、嗣封、紹封の本質を明かにせられ、更に進んでは、古代西歐の社會狀態とも比較して、極めて興深く、その論旨を進められたり。

一、閉會之辭

諸 橋 會 長

(尚、牧野文學士の右研究は、東方學報(東京)第三號に發表ある筈に付き、有志の士は就きて之が詳細を御覽あり度し)

○第三回研究發表會

十二月三日(土)午後一時より漢文學研究室に開催。漢文學科

聽講生唐卓羣女史の研究發表あり、終りて過ぐる八月、内野教授引卒の下に、遠く北支滿鮮を巡遊し來たれる十名の學生の視察旅行談報告會に入る。四十餘名の來聽者を得て、近來の盛會なり。

尚、右終了後、折柄御來聽の先輩、佐藤正範先生は、特に一場の御感想を述べられ、會は一入の盛況裡に終了するを得たり。當日の次第次の如し。

一、開會之辭

渡 邊 君

一、宿命説について

唐卓羣女史

支那に於ける宿命説は、列子に創まり王充によつて大成した。列子は極端な宿命論者で、吾人の一舉一動は盡く命に出づると論じた。此の宿命説は孔子(論語・易傳)子思(中庸)孟子(孟子)等の儒家に繼承せられて天命に安ずる説となり、楊子、莊子等の道家に繼承せられて自然無爲の説となつた。説く處多少の差はあれども、宿命論たることに於て一致してゐる。かくて漢代に至り王充は此の思想を發展し、天地萬物は一元氣より發生するもので盡く定命ありとし、宇宙の萬象を盡く宿命によつて解し去つたのである。宿命説によるときは人類は甚だ無力のものとなり、一切は極めて消極的のものとなつて、政治も道德も無意義となる。之の點に於いて早く宿命説に反對を唱へたのは墨子である。墨子は人の自由意志を認め、勞作によつて社會國家に奉じなければならぬと論じた。その力あるも命なしと論ずる所は、佛門の因果説と類似してゐる。現在に於いては宿命説は單なる過去の思想的遺産

となつて、其の存在の價値はなくなつた。

一、北支滿鮮旅行談

内野 敬授
以下十名

一、旅行談を承りて

佐藤正範先生
渡邊 君

一、閉會の辭

○第四回研究發表會 附講演會

學年末を間近に控へたる、昭和八年二月十八日(土)午後一時より、第四回研究發表會を漢文學研究室に開催せり。折柄の如月の風寒きにも拘はらず、來聽者三十餘名に及び、左記發表に耳を傾けたり。

一、戴東原に就いて

小澤 文四郎君

氏は先づ支那經學史上に於ける清代學術の位置を概観して後、その特異なる清朝經學史上に於ける戴東原の位置を一瞥し、續いて彼の哲學の原因に及び、その哲學大系を巨細に分析して之が略評を試み、最後に彼の學風の特長を擧げて、彼の研究の忽にすべからざるを論斷せられたり。

一、覺者と學者

田口福司朗先生

覺者と學者との本質を明かにせられて後、世道人心を作興するは、漢學に依てこそ可能なる可しと道破せらる。其の眞摯なる熱辯は聽者の胸臆を振動し、漢學に志す者に正しき方途を指示せられたるものなり。

かくて寒氣餘りに烈しきの故を以て、會場を第二會議室に移し直ちに左記講演會に入れり。

一、王觀堂の一面

岡井慎吾博士

博士はその御専門の小學の方面より、王觀堂(國維)がその方面に於ける行蹟を窺はんとて、先づその傳記を略説され、次いで彼の小學に關する論著の中より、特に「爾雅草木蟲魚鳥獸釋例」「觀堂古金文考釋」「觀堂集林の中の芸林、卷七、卷八」を摘出して、こゝに彼の創見に富める部分を探られたり。而してその一二の例に就きて、觀堂の創見に批判を加へ、やがて御自身の卓見の片鱗をも洩らされ、極めて有益なる示唆を與へられたり。

尙博士は數日間の御滯京にて極めて御多忙なるにも拘はらず、特に我學會の爲、その貴重なる時間を御割き下されしものにして、一同その御厚意に感謝しつつ、本學年度掉尾の例會を盛會裡に終了せり。時正に午後五時半。

○報 告

本學開設と共に漢文學科主任教授として御就任の島田先生には本科の基礎確立の上に、又研究室の整備の上に、幾多の一方ならぬ御盡力を忝うし、特に本學會の設立に際しては、その目的の標識の上に、その將來の活躍方途の上に、銳意、日夜御鞭撻御指導下されしが、適、去る三月、第一回卒業生を出すと共に、大學は全く完成し、本科將來發展の基礎愈々確立したると、且つ御自身の御

老齡との故を以て、教授の職を退かれぬ。學生一同事の突然に驚き、尙暫くの御猶豫を乞はんとせしも、先生の御決意牢として抜く可からず、茲に講師として先生の御指導を仰ぐの止を得ざるに立到りぬ。従つて本學會長の職も自然御退き相成りたるに就き、今後は専ら顧問としてかの御懇篤なる御指導を仰ぐことゝなれり。我々は今更に當ての先生の御懇情に謝し、併せて今後の御指導を願うて止まざる次第なり。

かくて本學會は、新會長として諸橋教授を迎へぬ。研究に、指導に、濼淵として倦むを知り給はざる新會長の下に、本學會の飛躍亦期して待つ可きものあらんのみ。乞ふ今後に期待せられよ。

編輯後記

寒威漸く去つて、ほの暖い春の息吹に萬物が甦らうとする折柄、會報第一號を發刊して、皆様の机上に呈することの出来るのは、我々の欣幸に堪へないところであります。こゝに我々は、發會以來の本會の足跡を顧みて、更に將來への展望を豊かにすることが出来、春に魁けて新生への歩みを運ぶことが出来ようかと思ひます。

かくて本號には、過ぐる一年間本會に於いて爲された講演及び研究發表會の速記を出来るだけ多數掲載することに主眼を置き、更に本年一月本學に開かれた中等教員國漢科講習會に於いて講ぜられた諸橋教授の「書物の話」を附加して、一層光彩を添へた次第であります。然し編輯者の不馴れの爲、その排列の上に、或は

その體裁の上に、遺憾の點が無いとは云へませんが、之等は號を逐ふに従つて改善し、勉て近き將來に、かゝる會報から機關誌への實を擧げて、學界への寄與を更に大にせんと考慮して居るのであります。

尙次號には消息欄を設けて、會員の最近の動靜を明かにし、相互の親睦を謀り、學會への御希望、御意見等をも承り、以て切磋琢磨の資に供し度とも存じて居ります。

最後に皆様方の御健勝をお祈り申上げると共に、何卒刮目して本會の前途を御待ち下さる様お願ひ致します。

(皇紀二五九三年紀元節の夕)

漢文學會々報 第一號

昭和八年三月五日 印刷
昭和八年三月十日 發行

(非賣品)

編輯者

東京文理科大學 漢文學會

上 島 一 夫

印刷者

東京市荏原區戸越町二二九八

市 川 茂 市

印刷所

東京市荏原區大塚窪町

市 川 活 版 所

發行所

東京市小石川區大塚窪町
東京文理科大學漢文學會

東京文理科大學漢文學會會則

一三八

- 一、本會ハ東京文理科大學漢文學會ト稱シ、事務所ヲ東京文理科大學漢文學研究室内ニ置ク
- 二、本會ハ漢文學ノ研究及ビ普及ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 三、本會ノ會員ハ左ノ人々ヲ以テ組織ス
 - 1 東京文理科大學及ビ東京高等師範學校漢文學科關係ノ教官並ニ講師
 - 2 東京文理科大學漢文學科生及ビ卒業生
 - 3 東京高等師範學校文科第二部(國漢)生徒及ビ卒業生中漢文研究ニ篤志ナル者
 - 4 其ノ他ノ漢文學研究ニ篤志ナル者
- 四、本會ノ主ナル事業左ノ如シ
 - 1 研究發表會
 - 2 講演會
 - 3 研究旅行
 - 4 雜誌 (追テ發行ノ見込ミ)
 - 5 其ノ他必要ナル事項
- 五、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 1 會長 一名
 - 2 顧問 若干名
 - 3 評議員 若干名
- 六、會長ハ本會ヲ代表シ、會務ヲ總理ス
顧問ハ會長ノ諮詢ニ應ズ
評議員ハ評議員會ヲ組織ス
評議員會ハ會長之ヲ召集シ、重要ナル會務ヲ議ス
會長ノ委囑ニヨリ評議員中一名ヲ會計監督トス
委員ハ會長ノ指示ヲ受ケ、會ノ研究、會計、編輯ノ事務ヲ分擔ス
- 七、會長ニハ東京文理科大學漢文學科主任教授ヲ推ス
評議員ハ東京文理科大學並ニ東京高等師範學校漢文學科關係ノ教官講師及ビ其ノ他ニツキテ會長之ヲ委囑ス
顧問ハ評議員會ニテ之ヲ推薦ス
委員ハ東京文理科大學漢文學科學生中ヨリ六名、其ノ他ヨリ四名、會員ノ互選ニヨリテ選出シ、其任期ヲ一ケ年トス、但シ重任ヲ妨ゲズ
- 八、本會會則ノ變更ハ評議員會ノ議決ヲ經ベキモノトス
- 九、會員ハ會費年額金壹圓ヲ納ムベキモノトス

以上